九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

水原秋櫻子研究 : その俳句形成過程について

野中, 亮介

https://doi.org/10.15017/2534370

出版情報：Kyushu University, 2019, 博士（比較社会文化）, 課程博士
バージョン：
権利関係：

氏　　名　：野中　亮介

論 文 名　：水原秋櫻子研究　ーその俳句形成過程についてー

区　　分　：甲

論　文　内　容　の　要　旨

本論文は昭和六年から昭和十五年までの約十年間に興った俳句近代化運動の中心的役割を果たした水原秋櫻子の俳句形成過程を考察し、その意義を論証したものである。

俳句近代化運動は反伝統、反「ホトトギス」を旗印に、近代的抒情や感覚の発揚による表現方法の革新と、俳句形式による思想性・社会性の領略を目ざして興り、それによってもたらされた新興俳句は現代に至るまで多彩な広がりを見せて来た。しかし、その嚆矢とされる秋櫻子について論じたものは少なく多くの点が解明されていない。そこで本研究では七章にわたりその俳句形成に関わった要因を検討し秋櫻子の全体像を明らかにした。

第一章では秋櫻子が師事した窪田空穂から学んだものを短歌俳句両面から考察した。作者の主観を重要視する秋櫻子の態度が空穂の「調べ」の中に作者の主観を乗せて詠むという主張から影響を受けたものであることを論証した。また、空穂は空想を詠むことを認め秋櫻子はこれを俳句で発展させ、虚子の「客観写生」と相容れぬものとなり「ホトトギス」離反の一因になったと結論付けた。

第二章では秋櫻子の山岳俳句が空穂の日本アルプス諷詠とセザンヌに影響を受けた安井曾太郎の山岳風景への憧憬によることを解明した。昭和十年代の俳壇で斬新であった秋櫻子の山岳俳句は素材自体が翻訳された西洋文明であり、欧州風景に接した安井の絵画の風景を模写した結果であることを明らかにした。

第三章では虚子と秋櫻子の自伝的散文から写生の方法と空想を軸に差異を検討した。虚子の空想は「古人が一握りづゝの土を運んで築き上げて呉れた趣味」であり根底には事実がある。一方、秋櫻子の写生は頭の中の理想の風景に当て嵌まる実際の風景を探す作業で空想の世界から自らの主観を基に素材を得て理想郷を構築する作業である点を論証した。

第四章では秋櫻子句集『古鏡』に多く詠まれた野鳥の出所を、中西悟堂との出合いや昭和九年創刊の「野鳥」との関係、さらには昭和十五年頃にピークを迎えたハイキングの流行にあることを明らかにした。野鳥も「西洋画風」の一風景として作品化されている。こうして出来た俳句は結果的に日本的な風景とすり替わってしまうことを指摘した。

第五章では秋櫻子俳句の特徴とされる外光豊かな絵画性について論考した。山本健吉が印象派の画家に譬えた秋櫻子だが、実際に私淑したのは安井曾太郎であった。この事実は秋櫻子の主観を尊重した作句姿勢が「白樺」のようにセザンヌらの原画から得た自我意識に発したものではないことを意味する。安井の中で咀嚼され変換されたセザンヌや後期印象派などを追体験して成長した秋櫻子の俳句は東洋的な思想の中に俳句を導いてきた虚子とは相容れぬものであったことを論証した。

第六章、第七章では秋櫻子と関係の深い二人の俳人を通じて側面から秋櫻子を捉えて行く。第六章では虚子選の「ホトトギス」雑詠と大正十一年一月号より虚子が選者を務めた「主婦之友」の投句欄を資料とし、「台所俳句」の推移を追うことで虚子が俳壇に求めていたものを追いつつ、秋櫻子選の「馬酔木」の雑詠および虚子の後に携わった「主婦之友」の投句欄の選句と突合させ、女性を

対象とした二人の選句姿勢の差異をジェンダー的な解釈を加えながら浮き彫りにした。

第七章では「馬酔木」山岳俳句の代表作家であった石橋辰之助の離脱の意味を考察した。海外の山岳映画から影響を受けた劇場照明技師の辰之助が、無季俳句につながる連作俳句を映画のモンタージュ理論を応用して進展させることを危惧した秋櫻子は、それを容認した誓子派と距離を置いた。これは秋櫻子の無季俳句を中心とした新興俳句運動への限界を意味すると結論付けた。

以上の考察をもとに「ホトトギス」の俳壇支配から解放されるためには秋櫻子が空穂から学んだ主観を乗せた流麗な調べという聴覚的要因と、安井の絵画に触発され作句した西洋化された明るい風景との視覚的要因が必要であったことを明らかにした。しかし、後者が風景や人々の営みの中に日本的なものを隠蔽してしまう結果となったことより、日本人としての思想性・社会性を描くという無季俳句をふくめた新興俳句の発展には繋がらず、ここに秋櫻子の限界があることを論証した。